

行為要求場面におけるほのめかし表現はどのように解釈されるのか

—関連性理論の観点から—

頼俊雯(大阪大学大学院生)

1. はじめに

本稿で対象とする「ほのめかし (off record)」とは、「言外の意味」であり、本当の発話意図が言語化されていないことを指す。ほのめかしを実現する言語表現を〈ほのめかし表現〉と呼ぶことにする。本稿では、話し手が聞き手に何らかの行為を行うよう働きかけるような行為要求場面、特に依頼場面を中心に考察を行う。行為要求場面におけるほのめかし表現はどのように解釈されるのか、ほのめかし表現の伝達の仕組み及び解釈過程を解明することを本稿の目的とする。Sperber & Wilson (1995) が提唱した関連性理論 (Relevance Theory) は、聞き手がどのように話し手の意図した意味を推論しているのかという推論過程の解明を目指した理論である。本稿の目的を達成するにあたり、Sperber & Wilson (1995) の関連性理論を用いることは非常に有効な説明手段であると考えられる。本稿はテレビ番組のセリフを利用し、関連性理論の観点から、行為要求場面におけるほのめかし表現はどのように解釈されるのかについて検討する。

2. 関連研究

Sperber & Wilson (1995) が提案する関連性理論は、普段私たちが行なっている発話解釈の仕組みの解明を目指した理論である。関連性理論では発話の非明示的意味である暗意について「話し手が伝えようと意図した意味のうち、明意以外のもの」と定義している。以下の恋人同士の会話例を用いて説明する。

- (1) a. 亜希：明日一緒にスニーカーを買いに行かない？
b. 海斗：明後日テストがあるんだよ。 (作例)

(1b) で海斗は、亜希と一緒にスニーカーを買いに行くとも行かないとも言っていない。しかしこの発話を聞いた亜希はすぐに (2) のように推論し、海斗はテストの前日は勉強をするためスニーカーを買いには行かないと理解するだろう。

つまり、(1b) から復元される明意 (2a) とテストに関してすぐに思いつくような想定 (2b) を前提に、結論として (2c) を引き出したのである。

- (2) a. 明後日テストがある。
b. テストの前日は勉強をするため外出しない。
c. ∴ 海斗は明日スニーカーを買いに行かない。

海斗は (1b) の返答で言葉にはしていないが、(2c) だけでなく、明日スニーカーを買いに行かない理由 (2b) も亜希に伝えようと意図しているだろう。関連性理論では、(2b) と (2c) とも (1b) の暗意と捉え、(2b) を「暗意された前提 (implicated premise)」, (2c) を「暗意された結論 (implicated conclusion)」と呼ぶ。

3. ほのめかし表現の解釈過程

本章は Sperber & Wilson (1995) の関連性理論を援用しつつ、行為要求場面におけるほのめかし表現から、その発話意図にたどり着くプロセスを解明する。以下の例を用いて考察する。

- (3) 背景：新入社員のサアヤとユタカ 2 人が料理の話をしている。サアヤはスパイスカレーを作るのに熱中していると話し、作っている料理の写真をユタカに見せる。

- 01 ユタカ：俺も社会人になって、一人暮らしになって、最近自炊始めたから、こういうのは懂れるよ。
02 サアヤ：じゃあ、レシピ教えようか？
03 ユタカ：いいの？俺にもできるかな。
04 サアヤ：じゃあ、帰ったら送りたいから…
05 ユタカ：LINE¹！知らなかったね、そういえば。
06 サアヤ：うん…
(この後に LINE を交換する)

テレビ朝日系列『あざとくて何が悪いの』2021年7月3日放送

「じゃあ、帰ったら（レシピを）送りたいから…」の発話に対し、ユタカは「LINE！知らなかったね、そういえば。」と答え、サアヤは「うん」と同意を示しており、その後 LINE 交換したということから、サアヤの発話「じゃあ、帰ったら送りたいから…」は「連絡先を教えてください」とほのめかしており、ユタカの反応からその暗示された依頼が理解されたことが分かる。

言語形式からみると、発話「帰ったら送りたいから…」は希望表現「たい」と接続助詞「から」で言い終わる未完結な文である。国立国語研究所（1951）は、終助詞的用法を持つ「から」については、「理由となるべき事がらを挙げていったん言いさし、帰結を言外に暗示する」と述べている。三宅（2011）は、日本語社会では、聞き手は相手の気持ちや状態に気を配り、相手の欲するところを充すべし、という社会的規範があると述べている。つまり、相手の希望に気づいた時点で、なるべく相手の希望を満たそうとするという社会的通念があると言える。

心の中にある自分の希望・欲求を聞き手に向かって発言することは、Grice（1975）の協調の原理の「関係の公理（関係のあること言う）」に従えば、その希望はその文脈や聞き手と関係がある。話し手は希望・欲求を聞き手に対して語ることで、話し手の現在の状態は、その欲求・希望が満たされていない状態であることを窺わせる。こうして、「話し手に希望・欲求が存在することを言明する」→「その欲求・希望が満たされていないと暗意される」→「希望を抱いているのに、満たされていないということは、話し手はその希望を自分では叶えることができない・難しい」→「聞き手に向かって発言するというのは、それが聞き手にとって関係のあることである、つまり、話し手は聞き手にその希望を叶えてもらいたい」というように、依頼をほのめかすことに繋がる。

また、関連性理論の観点から、「じゃあ、帰ったら送りたいから…」から「連絡先を教えてください。」という解釈への到達には以下のような発話解釈処理が行われていると考えられる。

- (4) a. 発話：じゃあ、帰ったら送りたいから…
b. 明意：話し手は家に帰ったらレシピを聞き手に送りたいからと述べている。
c. 暗意された前提 1：通常相手に何かを送るためには相手の連絡先が必要である。
d. 暗意された前提 2：話し手と聞き手は知り合ったばかりで、お互いの連絡先は知らないという事情を

¹ LINE：モバイルメッセージングアプリケーション

話し手と聞き手は互いに認識している。

- e. 暗意された前提 3: 聞き手の連絡先を持っていない場合、レシピを送ることができない。
- f. 暗意された前提 4: 聞き手が話し手に連絡先を教えれば、レシピを送ることができるようになる。
- g. 暗意された結論: 話し手は聞き手に連絡先を教えてくださいとほのめかしている。

「じゃあ、帰ったら送りたいから…」に対して、聞き手は人間の「共同体の共通の基盤」(岡本 2000)として(4c)「通常相手に何かを送るために相手の連絡先が必要である」のような想定を呼び起こす。また、話し手と聞き手は新入社員であり、知り合ったばかりで、お互いの連絡先は持ってないという事情を話し手と聞き手は互いに認識しているはずである。そのため、想定(4d)を呼び起こす。また、一般常識として、連絡先を持っていないならレシピを送ることができないため、想定(4e)を呼び起こす。さらに、話し手は聞き手の行為によって、話し手の希望「送りたい」が満たされることが可能である。このように、想定(4f)「聞き手が話し手に連絡先を教えれば、レシピを送ることができる」を呼び起こす。

これらの暗意された前提をもとに演繹推論を行い、関連性を達成できる(4g)の暗意された結論「話し手は聞き手に連絡先を教えてくださいとほのめかしている」に到達し、話し手の依頼の発話意図を解釈できると考えられる。関連性理論では、ある発話が聞き手の持っている想定と相互作用して認知効果を生むと考えられる。また、認知効果における改善には、ある発話が聞き手の既存の想定と結びつき新たな結論であるコンテクスト的含意を導き出す場合があると述べている。上の例(4)は、知識や記憶から呼び起こす既存の想定(4c, 4d, 4e)、及びその場で新たに作り出される想定(4f)と結びつき、関連性の高い結論であるコンテクスト的含意(4g)が導き出される例であると言える。

この例では、<話し手の希望>に言及し、「から」による未完結な文を用いることで、「希望を満たすことができないこと」が暗意され、依頼をほのめかしている。詳しく述べると、このほのめかし表現の伝達の仕組みは次のようになる:【話し手は何らかのことを希望しているが(レシピを送りたい)、現実には何らかの原因(連絡先が知らない)のため、その希望を満たすことができない(レシピを送れない)という望ましくない状況に置かれている。だが、聞き手の行為によって、話し手はその希望を満たすことが可能である(連絡先を教えてくださいとほのめかす)。】

4. ほのめかし表現の伝達の仕組み

依頼場面におけるほのめかし表現は次のような伝達の仕組みになっていると言える。話し手は何らかのことを希望しているが、現実には何らかの原因でその希望を満たすことができないという望ましくない状況に置かれている。そこで聞き手の行為によって話し手の希望を満たすことが可能であると想定し、聞き手に対して、話し手が希望を満たすことを可能にする行為を行なってくださいとほのめかす。

ほのめかしによる依頼の伝達の仕組みの最初の段階は、「話し手は何らかのことを希望しているが、現実には何らかの原因でその希望を満たすことができない」であるため、聞き手が当該の発話に文字通りの意味(だけ)ではなく裏の意味があること、つまりほのめかしであることに気づき始めるためには、「話し手は何らかのことを希望しているが、現実には何らかの原因でその希望を満たすことができない」ということに気づくことが重要であると言える。それゆえ本稿では、依頼場面において、聞き手にほのめかし表現の発話意図を分かってもらうために、話し手が以下の二つのことを念頭においていると考える。

- ①話し手は自身の希望を聞き手に発露する。
- ②話し手は自身の希望を満たすことができないことを聞き手に伝達する。

また、収集したほのめかし表現の用例から、ほのめかし表現の内容には<話し手の希望>や<話し手の希望を満たすことができないこと>以外に、両者の<理由・背景>も見られる。本稿では、話し手の希望を「P 希望」とし、話し手の希望を満たすことができないことを「Q 不可」とし、希望や希望を満たすことができない理由を「Z 理由」とし、発話意図である依頼文を「R」とすると、依頼場面におけるほのめかし表現の伝達の仕組みは以下図1のように示すことができる。即ち、依頼場面におけるほのめかし表現の伝達の仕組みは、【理由・背景→話し手に希望が存在する →話し手の希望を満たすことができない → (依頼表現)】という流れになっている。

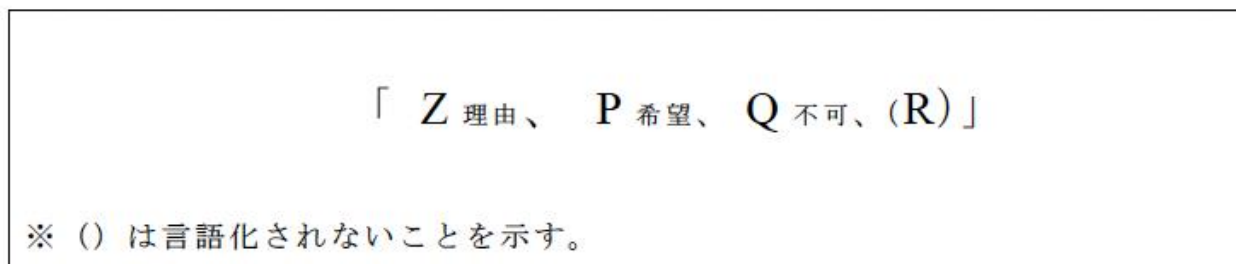


図1 依頼場面におけるほのめかし表現の伝達の仕組み

ほのめかし表現は「Z 理由」、「P 希望」、「Q 不可」のどれか一つを言語化する場合もあれば、複数言語化する場合もある。また、「Z 理由」には「P 希望」に関する理由の場合もあれば、「Q 不可」に関する理由の場合もある。

5. おわりに

本稿では Sperber & Wilson (1995) の関連性理論の観点から、行為要求場面、特に依頼場面におけるほのめかし表現はどのように解釈されるのか、ほのめかし表現の伝達の仕組み及び解釈過程を解明した。その結果【理由・背景→話し手に希望が存在する →話し手の希望を満たすことができない → (依頼表現)】という流れになっていることが明らかになった。

参考文献

- Grice, H. P. (1975) "Logic and conversation." In P. Cole and J. L. Morgan (eds.). *Syntax and Semantics 3 Speech Acts*. Academic Press, 41-58.
- 井門亮 (2020) . 関連性理論 加藤重広・澤田淳 (編) はじめての語用論基礎から応用まで 研究社 pp.109-124.
- 国立国語研究所 (1951) . 現代語の助詞・助動詞—用法と実例 秀英書店
- 三宅和子 (2011) . 日本語の対人関係把握と配慮言語行動 ひつじ書房
- 岡本真一郎 (2000) . ことばの社会心理学 ナカニシヤ出版
- Sperber, Dan and Deirdre Wilson (1995) *Relevance: Communication and Cognition*, Blackwell Oxford. [内田聖二・宋南先・中達俊明・田中圭子 (訳) (1999) 『関連性理論—伝達と認知』 研究社出版.]

用例出典：

『あざとくて何が悪いの』2020年10月10日よりテレビ朝日放送